

巻頭言

中央大学附属中学校・高等学校

学校長 石 田 雄 一

本校に限らず、学校は今様々な課題を課せられている。本校のスタッフは、日々そうした課題に 대응しようと様々授業改善・授業開発を考え、それを実行してきた。今号に寄せられた論文は、そうした日々の実践の記録もしくは新たな提案として読むことができる。

昨今、「対話的で深い学び」が求められているが、そこで求められている「対話性」が意味するところは明確ではない。山村和世の論考「教育が「対話的」であるとはどのようなことか？」はまさにそれを表題で問い、プラトンの対話篇『メノン』を参照しながら、その問いに答えることを試みるものである。プラトンの描くソクラテスの「対話」は一種の背理法であり、そこに見られる「対話性」は、学びに求められるそれとは異質のものかもしれない。しかし「対話性」の概念を広く取るなら、そこからも様々な可能性が見えてくる。こうした考察が本校の今後の教育活動にどのように生かされるのか期待される。

また、本校は過去七年間にわたってSSH事業の一環として新たな授業を開発してきたが、それらはSSH指定校となる以前から学校設定科目として実施してきた様々な「プロジェクト」の延長線上に成り立っている。細川桃子は、二〇二〇年度まで開講されていた学校設定科目「Project in Science」をそうしたプロジェクトの一つとして位置づけ、それについて「中学校設定科目 Project in Science 九年間の実践報告と現在の探究授業へのつながり」の中で詳述している。

金井利浩は、『仁和寺にある法師』のために」において、教材となる古典に関する研究成果がなかなか教育に反映されないという現状を『徒然草』第五二段を例に指摘した上で、最新の研究成果を教育に取り入れることが授業改善につながることを説いている。この論考からは、本校教員として勤務する傍らで数多くの研究論文を執筆してきた金井自身が、自らの研究成果を教育に結びつけることで授業改善に努

めてきたことが推し測れる。

山村和世／禰覇陽子は、「自己効力感をめぐる謎／男女別分析／文系・理系はどう決まるか？」の中で、本校が独自に行う「コンピテンシー自己評価アンケート」に基づき、本校生徒の傾向を分析し、貴重な提言を行っている。本校生徒は他校に比べて「自己効力感」が低いことは以前からアンケートの分析から知られていたが、山村／禰覇はアンケート調査を中学生にも広げることにより、在学中の自己効力感の推移の原因を探るとともに、そのジェンダーによる傾向の差や、その他、文理の選択を分ける時期や要因について細かな分析を行っている。

今日、グローバル教育を実現する上で、生徒の海外研修は有意義な機会である。ラブ・アダム／雨笠瞳子は、「第二一回 英国短期語学研修報告」の中で、今年度の英国短期語学研修について、引率者の視点から報告している。アンケートに基づく生徒の反応だけでなく、語学学校の授業や催しに関して、引率教員の立場からの評価も交え、良いところも悪いところも忌憚なく語られている。

また生徒の不登校が深刻な問題となった昨今では、相談室の役割も大きくなっており、生徒や保護者が早い段階で相談室につながる体制づくりは喫緊の課題である。この課題に対して、高校担当のカウンセラーである半田知佳は、「相談室の利用状況と相談室アンケート調査に関する報告」の中で、アンケート調査をもとに現状分析をした上で、Web フォームによる初回予約や「相談室便り」等、相談室の存在を生徒・保護者に周知し、相談につなげやすくするための工夫について報告している。

こうした諸々の課題に取り組む論文や報告が今号には数多く寄せられている。これは、課された課題に積極的に取り組もうとする本校のスタッフの姿勢の現れに他ならず、それゆえ、本校の関係者のみならず、本校の教育実践に興味を持たれる校外の方々にも是非とも読んで頂くことを切に希望する次第である。